

中外雑記

兵庫

八王寺が来年五月に落慶

●曹洞宗 昨年一月の兵庫県南部地震で多くの寺院が倒壊したが、ようやく復興に向けて再建工事に掛かった寺院が目立つようになってきた。“般若林”八王寺（志保見道元住職、神戸市兵庫区羽坂通二ノ一）も本堂や庫裡等が全壊し、山門脇の岩も崩れて道に広がる惨状を呈していたが、昨年八月には鉄筋二階建ての本堂の再建を始め、現在は一階部分にコンクリートを流す段階まで来ている。来年五月には落慶法要を執り行なう予定。

宿願の大事業がいよいよ

▽兵庫県第一宗務所のある墨染寺（三輪昌伸住職、伊丹市中央六）は平成四年、本堂増改築工事および庫裡、鐘楼門、薬師堂、観音堂など諸堂の新築に着工。昨年十一月に予定していた落慶及び授戒は震災のため計画の変更を余儀なくされたが、完成も間近となり四月二十七日に落慶法要を執り行なう。また同日の午後から五月一日まで梅田信隆大本山総持寺貫首を戒師に迎えての授戒、さらに同寺の開山・雲峰宗端大和尚の三百回忌、先代住職・道隆氏（二十三世）の三十三回忌も予定しており、三輪住職の長年の宿願ともいえる大事業がいよいよ一つの区切りを迎える

▽同寺で授戒を行なうのは八十年ぶり。「先代は戦災の復興に追われ、果たせずじまいだった」と三輪住職はその想いを受け継いだことに感慨深げ。諸堂についても平成三年に園田学園女子大学の教授職を辞め、翌年に着工したものの設計の二度の変更や土地買収などが重なり予想外の工期と費用となった。それでも昨年の正月はようやく完成が見えたはずだった。それがあの大震災。「建設中の諸堂も被害を受けた。何より檀家のほとんどが被災し、宗務所長としても管内の救援活動などに追われ、予定を延ばさざるを得なかった」。四月に行なう授戒の戒弟は二百五十人を予定している。「ようやく檀家の復興も目度が出てきたので、二月頃には一気に申し込んでくれると期待している」

▽落慶する諸堂は、庫裡が鉄筋の四階建て、薬師堂と観音堂が鉄筋二階建て、それに鐘楼門とどれも重厚な造りだ。薬師堂にまつられる薬師如来は、入宗に願を掛け帰朝後にお礼を述べたと伝えられる道元禅師ゆかりの丈六の坐像。天正年間に伏見・墨染から同寺に遷座されたとのいわれを今に伝える。観音堂と薬師堂は多目的に使用できるのも特徴。

社説

宗教よはばたけ

「昨年の事件を教訓に」

新春の社説であるから明るい展望を述べたいが、昨年は年頭から驚天動地の事件が相次ぎ、その痛みが我らの心に刻み込まれているので、明るい今年を築くために昨年の諸事件から教訓を学び、新しい年への期待を述べたい。

昨年は一月の阪神、淡路の大震災から始まった。未曾有の大被害を出し、多くの被害者は政府の初動体制の遅れ、危機管理能力の無能無策ぶりから死ななくても済んだ人々まで殺してしまったが、今も住む家もなく、職業を失い、塗炭の苦しみに喘いでいる人々もいる。途上国への開発援助も大切だが、「愛は近きより…」という古諺もあることでもあり、政府・自治体は国をあげて万全の救済を行なってほしい。

せめてもの喜びと慰めは民間・宗教団体のボランティア救援である。人情紙のごとく薄いと思われた現代社会の中から、このような献身的な奉仕が行なわれたことは前途に希望を抱かせる。官尊民卑の悪習、政権勢力にへつらう陋習を打破する“草の根”の活力の目醒めとも思われ、慶賀にたえない。

しかし、天災は忘れた頃にやってくると言われ、しかも我が国は屈指の地震国であるから、災害に備えての万全の態勢と災害予備金の備蓄が不可欠である。国民はそのための税金を惜しまないであろう。

あの天災に引き続いて、国民を驚かせ、怒らせ、悲しませたのはサリン事件を頂点とする一連のオウム教団指導者たちによる連続殺人事件である。この事件は宗教を有益無害とみなしていた多くの人々に、極端に言えば宗教に対する疑念と不信をひき起こした。

とは言え、国民の多くは、オウム真理教なる悪魔的宗教と伝統的既成宗教や新宗教、諸宗教を同一視しているのではないことを、今年の国民的レベルでの初詣での人々の数にも見ることができる。にもかかわらず、自民・社会・さきがけの与党と村山富市内閣と野党・共産党は宗教教団をひとからげにして、凶悪事件の予防のためと称して犯罪の取り締まりとは全く無縁な宗教法人法の改悪を強行したことは、「信教の自由」を根源とする民主主義社会を破壊する乱暴きわまりない悪政の施行であり、禍根を後世に残してしまった。

宗教法人法を変えることに賛同した教団は多年の政権党だった自民党との因縁や創価学会憎し（憎嫉・怨嫉）などの理由で賛同したのだろうが、これらの教団は宗教が政治によって意のままに動かされることにも賛同するというのだろうか。まさに政府・与党は宗教法人審議会の委員の声や有識者・経験者の意見を無視して改悪を強行したわけである。

宗教教団の監視、取り締まりを宗教界の自浄自律作用にまたずに政府が行なうというこの第一歩は、これに止まらず、やがては宗教法人法が戦前の宗教団体法のようなものに変質され、政府の都合で教団の弾圧までも行なうようになりかねないというのは単なる杞憂ではない。

幸い最近、諸教団の代表と有識者によって、宗教法人問題連絡会が発足し、信教の自由と政教分離の確立に協力してゆく運動態勢が整えられつつあることは喜ばしく、日弁連や改正賛同教団とも対話してゆく姿勢が示されたことは我が国、宗教界の慶事と言うべきであろう。

真宗

前向きに対応に期待

●**本願寺派** 旧臘二十六日、兵庫教区（土基謙教教務所長）の神戸市内の被災寺院を、同教区出身の豊原大成総務が視察、同総務らは雪の影響による交通渋滞に巻き込まれながら六カ寺の被災寺院を視察し、各々の住職らから現状についての説明を受けた。住職らは「門徒も被災していて寺の再建の話などとても持ち出せる状況ではない」等と実情を説明。また、災害対策金庫の融資を受けるに際し、住職の他に複数の門徒総代らの印が必要とされていることについて「これは門徒総代らには連帯保証人と受け取られて印を押してもらえない」と事務手続きの簡素化を要望した。これに先立ち昨年十一月三十日に兵庫教区では、災害対策金庫の融資枠の拡大、融資期間の延長、そして、返済義務の無い助成金の支出などを求めた請願書を提出しており、今回の視察はこの請願の内容を具体的に裏付けるために実施されたもの。一月早々には本山宗務所で災害対策委員会が開催される予定であるが、同教区の田中法劔教区会議長は「山口など他教区からも請願が出ており、被災寺院の住職である豊原氏が総務に入局していることなどを考えれば、必ずや当局としても請願の内容について前向きに検討して頂けると確信している」と今後の対応に期待を寄せていた

浄土

神戸で震災一周忌法要を

●**禅林寺派** 五千五百人を超す死者を出すなど大きな被害に見舞われた兵庫県南部地震から一年を迎え、同派（五十嵐隆明宗務総長）では十六日午後一時から、神戸市兵庫区中之島の阿弥陀寺（澤木亮道住職）で犠牲者の一周忌法要を執り行う。法要では森準玄管長導師を勤めるほか、五十嵐宗務総長ら一宗要職者らも出席し、犠牲者の霊を弔う

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)